



有松まちづくりの会役員会（7月25日）

30日から開催される国際芸術祭あいち2022で有松を訪れる方々をまちづくりの会としても、おもてなしの心でお迎えするとの思いを共有しました。

また、減少傾向にある会員数の増強を銘々が心がけ、有松のまちづくりについて考える仲間を増やし若返りを図ることを本年度の重点の一つにすることになりました。

研修旅行について、コロナ感染の状況を見ながら近場で検討することになりました。

有松×よさこい 名古屋大学”快踊乱舞(かいとうらんま)”演舞（7月3日）

名古屋大学よさこいサークル”快踊乱舞”の皆さんが、有松を舞台とした演舞「紡継(つむがれ)」を創られた。約4分の演舞が3回。数多の絞り、数多の色彩が躍動感ある踊りで宙を舞っている。

掛け声とともに一糸乱れぬ動き、凛とした舞いに上手を超えた有松への想いを感じ取ったのは私だけではあるまい。

大雨洪水警報の中、会場をイオン有松7階屋上駐車場から3階イベントスペースへ。中止と思い帰宅した観客も多く残念である。後日映像だけでも多くの人の目に触れる機会があることを切に願う。



〇〇 よさこいサークル「快踊乱舞」からのメッセージ 〇〇〇〇

企画を立ち上げさせていただきました、よさこいサークル名古屋大学"快踊乱舞"の渡会りおと申します。私達は、有松を舞台とした演舞を創っており、よさこいを通じて、もっと多くの人に有松の魅力を知ってもらいたいと考えております。

この演舞を初めて世に出したのは、6月4日。絞りまつりと同日に初披露ができたことにご縁を感じていました。いつかは有松の方々に前にして踊りたいと考えていたので、実現できて本当に嬉しく思います。

当日は、お天気には恵まれませんでしたでしたが、たくさんのお客様にご来場いただき、晴れ晴れとした気持ちでイベントを終えることができました。本当にありがとうございました。次は、8月末に行われます「日本ど真ん中祭り」※にて、もっとパワーアップした演舞を披露いたします！ご来場をお待ちしております。 ※ 8月26日(金) 久屋大通公園他で開催予定です。

第45回全国町並みゼミ新潟大会(6/11,12)

第1回開催地である有松にとって「全国町並みゼミ」は、有松まちづくりの会の中核といえる存在である。全国の先進事例に学び、歴史的町並みの保存活用により地域の活性化を行ってきた。その成果の一端が平成28年7月の重要伝統的建造物群保存地区選定であり、令和元年5月の日本遺産認定といえる。

今年度も竹田会長はじめ5名が参加され、全国の方々と交流されてきた。

新潟大会は県外からの200名を含め延べ400名が参加され、新潟の街中を舞台に開催された。市民活動でつなげる歴史まちづくりへの新たな展望を切り開く画期的な大会となった。それまでの重要伝統的建造物群保存地区中心の町並み保存とは一線を画す歴史まちづくりの可能性を切り開くことができた。「新潟:歴史まちづくり宣言」では、市民が連携し都市の歴史をたどりあらんかぎり想像力で遺された歴史遺産を活かし、次の時代を切り開くという歴史まちづくりのあり方を描き出し、画期的な成果をあげたと総括されている。

次回第46回大会は、2023年10月15日16日に小樽で開催される。

港湾都市 小樽の海運を支えた小樽運河をめぐり、1970～80年代にかけて市民による運河の保存運動が起こり、埋立・保存の対立から運河を観光資源として生まれ変わらせた事例をご存じの方もいるのではないかと。これにより観光都市 小樽への転身がなされた。

今回、竹田会長から新潟大会のお話をお伺いする中で、「小樽運河を守る会」の元会長である故 峯山富美さんと有松との関わりを知った。改めて有松が町並み保存運動の特別な場所であることに気づかされた。

【 お知らせ 】

全国町並み保存連盟の東海ブロックゼミが有松で開催されます。

2022年11月26日(土)



第1回有松・足助大会参加者の皆さん



分科会スライドから



小樽運河

国際芸術祭 あいち2022 ボランティア研修会（7月16日）

国際芸術祭で活躍が期待されるボランティアの全体研修会が愛知芸術文化センターで行われました。

4会場合わせて約900の方が申し込まれ、この日以外にも研修が行われました。

〔午前 9:30～11:00〕

3回目の研修で、ボランティア活動の一日の流れについての説明がありました。具体的には、活動時間の30分前に集合。有松での拠点は旧山田薬局です。朝礼後、配置場所で作品の看視や来場者への案内をします。休憩時間に作品の見学ができるそうです。ボランティア活動の具体的な説明が多いこともあり、参加者は私語一つなく聞き入っていました。

障がい者対応のための講話と車いすを使っての説明もありました。来場者がより快適に作品鑑賞を行ってほしいとの主催者側の思いが伝わってきました。

〔午後 12:00～13:00頃〕

有松でボランティア活動を行う方を対象に会場視察が行われていました。旧山田薬局前で有松地区12会場の場所の紹介が行われていました。参加者はマップを手に次々と展示会場を訪れ、説明板を読んだりしていました。参加者にお話を聞くと、「絞りまつりなど幾度か訪れたことがあります。改めて芸術祭にふさわしいところだと感じました」と好意的な反応を示している方が多かったです。

有松地区12会場

- | | |
|-------------------|------------|
| ① 山田家住宅(旧山田薬局) | ⑪ 旧加藤呉服店 |
| ② 竹田家住宅・竹田家茶室 栽松庵 | ⑫ 名古屋有松郵便局 |
| ③ 川村家住宅蔵 | |
| ④ 岡家住宅 | |
| ⑤ ゲストハウスMADO | |
| ⑥ 安藤家住宅 | |
| ⑦ 株式会社張正 | |
| ⑧ 中濱家住宅 | |
| ⑨ 有松・鳴海絞会館 | |
| ⑩ 碧海信用金庫有松支店 | |



この日の研修では、ボランティアが着用するTシャツが渡されました。当日の活動意欲を高めた方も多かったのでは・・・

ところで、Tシャツの赤色は「猩々緋(しょうじょうひ)」ということをご存じですか。有松には身近な色ですね。お祭りのときに見る山車の幕や猩々・天狗の衣装の色です。



4会場の場所

愛知芸術文化センター
一宮市・常滑市・有松



愛知芸術文化センター



午前の研修会様子 ↓ 午後の会場視察



近代のアリマツ ① 「岡家住宅の天窗」

岡家住宅の天窗は、人気あるガイド箇所の一つになっている。

この天窗で外壁に接していない部屋の採光が確保されている。天窗とは屋根瓦を剥がし、そこに板ガラスをはめ込んだトップライト。どうしてこのような造りが生まれたのか。

ご存じのように、日本の伝統的家屋は障子を通して室内が照らされている。陰翳礼讃(いんえいらいさん)に違いないが、ただ暗いだけとも言える。室内の照度を上げるために考え出されたのである。

開国後日本に輸入されるようになった板硝子は大変高価であった。入手した1枚を屋根にはめ込んで天窗を作り、室内を照らすようになった。その後、複数枚購入できるようになると、障子に1枚ずつ板ガラスをはめ込むようになった。これだけでも室内は明るくなった。「額入障子」「雪見障子」「猫間(ねこま)障子」と呼ばれるものである。

やがて明治40年(1907)旭硝子による国産化の成功により、板ガラスは徐々に全国各地に広がっていった。総ガラスの「硝子戸」が登場する。寒さを防ぐためでもあった。

岡家住宅の天窗は板ガラスの歴史を物語る貴重な資料である。ただ、天窗の多くは雨漏りが避けられないこともあって、消えていった。(「有松よもやまばなし」より)



有松と美 ① 春正蒔絵と服部家

春正とは江戸時代初期から京都で活躍した蒔絵師の家で、歴代の当主が春正を称した。山本春正家が名古屋に移ったのは寛政元年1789の正月、5代目春正正令(まさよし)の時と伝わる。前年の京都の大火により焼け出されたため、この地に多くの顧客を持っていたからと考えられる。この正令の三男春章(慶応2年1866没)が有松絞りの製造で知られる服部家4代に養子に入っている。

歴代春正作の膳椀などの食器や茶道具、懐石道具類は名古屋の人々に愛好された。蒔絵の技法としては「研出蒔絵」である。漆の接着力を利用して金や銀の粉末を文様に蒔き、一旦すべてを黒漆で完全に塗り込めて、その後砥石などで全面に研ぎ出す技法である。ガラスのような平滑な漆黒の肌の中に文様が現れて見える蒔絵の中でも最も古く奈良時代からある。春正蒔絵は金銀粉末のほか赤や緑の顔料の粉末も用いて色彩豊かな点に特徴がある。

(参考「Nagoya発」38/1996年12月 名古屋市発行)



松鶴蒔絵硯箱(名古屋市博物館)

催事・行事の予定

8月6日(土) 18:00 有松絞りアトラライブ 竹田家三番蔵

NPO法人 コンソーシアム有松

8月 8日(月) 18:00 有松町並み相談会 有松コミセン

8月22日(月) 18:00 有松まちづくりの会役員会 //

8月28日(日) 7:30 かえで道清掃 有松まちづくりの会

※ コロナの感染状況によっては変更になる場合があります。

発行者 竹田嘉兵衛 (有松まちづくりの会 会長)

編集者 加藤 明美 (有松まちづくりの会 広報部員)

pegasusb@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開しています。

絞り花火(協力:久野染工)

展示:7/15~8/31



イオン大高にて